

## 【特別講演4】 第23席

## 「三焦論」

東京 小池 盛夫

古典（素問、靈樞、難經）に記載されている三焦を理解する方法として、三焦を三つに集約して分類し、分析、考察します。

- (1) 六腑（臓器）の一つとしての三焦
- (2) 手の少陽三焦經に代表される經脈（經別等を含む）の三焦
- (3) 上焦、中焦、下焦の三つの焦に分けられた三焦

三焦とは、この三つの三焦をすべて包括した複合概念です。また、各三焦は、お互いに独立したもので、切り離して考察した法が理解が早いでしょう。

- (1) (2) (3) 各三焦の概略は次の通りです。

- (1) 六腑（臓器）の一つとしての三焦

臓器としての三焦が現在の解剖学上何に相当するかというのは、大きな関心事です。(2) の經脈の三焦、(3) の上中下焦の三焦を除外したうえで、五臓六腑の一つとしての三焦を考察した結果、実際に三焦という臓器が発生した時点で、何を指していたかは資料がないので不明ですが、医書である『素問』『靈樞』『難經』の作者は三焦を上中下焦の三焦で解釈理解しているので除外) に記載された内容から推定すると「尿管」であろうという結論に達しました。それは、三焦が、その形態、機能、病症（約、水の調節、水脹）など多くの点で膀胱と密接な関係があり、さらに腎との関連（「腎は三焦膀胱に合す」『靈樞』本藏）を加味して考えるならば、三焦とはおそらく腎と膀胱とを結んでいる尿管であろうということになります。この尿管説は、「三焦は決流の管、水道出づ（『素問』雲蘭秘典論）の意を満たすものです。この腑としての三焦は、『靈樞』営衛生会篇の下焦（迴腸から膀胱への通路）と働きや病症（水腫—『靈樞』五癰津液別）等を同じくするので、三焦を下焦と呼ぶことがあります（『素問』宣明五氣）、これは明らかに間違いです。腑の三焦と上中下焦はもともと考え方が違うので（三焦は臓器であり、上中下焦は氣血水の通路をいう）、似ているところがあったとしても同一視してはいけません。

腑である三焦の病症に対して、手の少陽三焦經とは別に、足の三焦經（足の太陽膀胱經の別絡で、治療点は委陽穴—『靈樞』本輸）が考え出されています。これは、手の三焦經が、腑である三焦と相入れないものであることを物語っています。

- (2) 手の少陽三焦經に代表される經脈（經別等を含む）の三焦

手の少陽三焦經は、三焦という臓器名を冠していますが、古い名称は、前漢初期（BC168年）の馬王堆帛書に記載の耳脈であり、臓器の三焦とは何等関係のない經脈であったと思われます。その帛書（足臂十一脈灸經）や『靈樞』經脈篇記載の是動病、所生病（耳聾、噤腫、喉痺、汗出、目銳眦痛、頰痛、耳後肩膊臂外皆痛む、小指の次指用いられず）の病症と、腑である三焦の病症（下腹の腫痛、小便が出ない、水腫、浮腫—『靈樞』邪氣藏府病形、四時氣、脹論）とを比較すれば、その違いが明白です。

手の少陽に三焦という臓器名が付加された理由を求めるためには、馬王堆帛書の十一脈（十一脈である理由は不明であるが、『靈樞』陰陽繫日月の手の經脈は十經で十《甲乙丙丁》、足の經脈は十二で十二支《子丑寅卯》に数を合わせる内容から推して、帛書も、手の脈は五脈《左右で十脈》、足の脈は六脈《左右で十二脈》で、十干十二支の数に符合するがいかげなものか）や『靈樞』本輸篇の十一經脈と五臓六腑（心包絡は、六陰六陽の十二經脈の数に合わせるため後で考え出された臓器）の十一という数による付会を考慮すべきです。經脈は五臓六腑とは別に発生し、後に結びついたと考える方が自然です。

耳脈が手の少陽經（素問、靈樞）に名を改めた後、臓器と結びつくことを本輸篇では「三焦は上手の少陽と合す」と述べ、經脈篇では、さらに進んで「三焦手の少陽の脈」と臓器名を頭に冠して、その関係を強調し、帛書では存在しなかった三焦への流注を加味しているのです。

手の少陽三焦經というフルネームは、『備急千金要方』（唐、孫思邈）に見えるのが古い所です。ち

なみに、経脈篇の手の少陽経の流注によれば、三焦は「膈を下りて循り三焦に属す」とあるように、横隔膜の下に位置する臓器であると考えられており、本輸篇では、三焦だけでなく小腸、大腸の三臓器がわざわざ他の経脈にはみられない「三焦は上手の少陽に合す」「（手の太陽）小腸は上太陽に合す」「大腸は上手の陽明に合す」という書き方をしているのは、大腸や小腸に加えて三焦が横隔膜の下にあることを暗示しており、横隔膜の下にある臓器が、横隔膜の上にある手の経脈と結びつくことを強調するものです。

(3) 上焦、中焦、下焦の三つの焦に分けられた三焦

上中下焦の三焦は、臓器の三焦とは別に、三焦の三にこだわった『靈枢』営衛生会篇の作者、あるいは、それに近い人が考え出した理論と思われます。上中下焦の三焦は、この営衛生会篇が最初であり、基本となります。他篇の上中下焦は、すべてこの篇の引用敷衍です。但し、正しく理解されて引用されているかどうかは疑問です。例えば経脈篇の「肺、手の太陰の脈、中焦に起こり」の中焦は、中脘または胃の代用であり、営衛生会篇の中焦（部位ではない）を曲解しています。

営衛生会篇によれば、上焦とは衛気の通路（流れ）、中焦は営気（末端の孫脈で血に変化—『靈枢』癰疽）の通路、つまり経脈（経隧）をいい、下焦は水の通路（迴腸から膀胱まで）をいいます。つまり、上中下焦はいいかえれば気血水の通路（流れ）ということになります。

この営衛生会篇の三焦だけなら、それほど混乱はなかったのですが、後世の注釈家（明の馬元臺、張介賓）によって『靈枢』邪客篇の三隧（宗気の隧、津液の隧、糟粕の隧）が、上中下焦の三焦であると解釈されたため、この三隧の関連で記載されている宗気、営気、衛気が何の疑いもなくそれぞれ、宗気は上焦、営気は中焦、衛気は下焦と関係をもつことになり、さらに宗気の胸部（上焦）、営気の上腹部（中焦）、衛気の下腹部（下焦）という理論の広がりを見せ、新たな三焦論が展開されていったと思われます。衛気が下焦と関係をもつのは、営衛生会篇の「衛は下焦に出づ」という誤文によるものと思われます。この文は明らかに間違いで、本来、「衛は上焦に出づ」となるべきです（『太素経』卷十二は上焦に作る）。邪客篇は三焦ではないのです。

上中下焦の三焦をさらに複雑にしたのが、『難経』三十一難です。この『難経』の三焦は、『靈枢』営衛生会篇に記載されている三焦とは全く違った独自の三焦論を展開しています。上中下焦を部位（心下部、中脘胃部、臍下部）とその部の機能（水穀の胃への搬入、水穀の消化、水穀の吸収伝導）としてとらえ、三十八難の「名ありて形なし」の意を満たすように作りかえています。この「名ありて形なし」という理論を、臓器である腑の三焦に当てはめるから、三焦がますますわからなくなってしまうのです。

三焦とは、(1) (2) (3) すべてを含めた総称です。